

よか ネット

YOKANET

NO. 15 1995. 5

㈱九州地域計画研究所



有田陶器市（4月29日～5月5日）お遍路さんを相手に、窯元や商家の人達がお土産に有田焼を売っていたが、1896（明治29）年、陶磁器技術向上のための品評会をきっかけに現在の陶器市がはじまる。今年で100年目。この一週間の来訪者は約80万人。（本文8頁）

も く じ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. やぶにらみ九州論10 高齢社会の新商品開発を行う先端産業の誕生
6. やまだ・楽しいまちづくり発表会
8. 有田町の陶磁器－製造業から新たな展開

〈見・聞・食〉

13. 長崎でてこいランドを視察して
16. お知らせ
17. 食場日誌

〈近 況〉

18. アジアと女性～地域ゼミからの報告
18. ツボの話～地域ゼミからの報告
19. 札幌市のマスタープランと北国の住宅事情についてうかがう～眞嶋二郎先生を迎えて
20. 私の近況／「陶友」のお地藏様・巨大船シーホーク出現・「うらしま太郎」インストラクター初体験
“一升懸命”でやっています
22. フレッシュマン紹介

〈本・BOOKS〉

23. 「日本の漁業」 河井智康 著
24. 「花の履歴書」 湯浅浩史 著

高齢社会の新商品開発を行う先端産業の誕生

—— (株)コムスンがはじめた24時間巡回介護システム ——

将来の日本のサービス産業の巨大商品開発が行なわれている。その商品は、支援の必要な高齢者に対する、24時間巡回介護システムである。この開発は、3つの点で革命的な意味をもっている。その第1は、顧客（介護の必要な人）のニーズに立脚しているということ、第2は、必要な対応だけを商品として販売することによって、比較的リーズナブル（合理的で可能）な価格になっていること、第3は、この2点が担保されることによって、日本の高齢福祉をトータルにカバーしうるシステム＝公的介護保険の基礎をつくりうることである。

私は以前から、民間企業で高齢福祉をやっているというコムスンという組織が気になっていたのだが、幸い榎本会長以下の方々に来て、話を聞くことができた。その中で介護サービスの商品化に対する綿密な取組みに対して心をうたれた。特にサービスにおける先端産業などというものは、ロットの整理や規格化、品質管理の方法などを通じた、ねばり強いサービス商品の形成努力が必要なのだということを感じた次第である。以下は、その報告と九州の産業開発についての日頃の思いを書いたものである。

1. 先端産業とは何か—あらゆる産業に先端と末端があり、先端産業という業種はない、また先端は小企業からスタートすることが多い

15年ほど以前のことである。ある県のテクノポリスのビジョンづくりをしていたとき、私がICだけをあまりに重視する計画に反対したため、先端産業の意味がわかっていないと云って、県の役人の方に軽蔑されてしまい、閉口してしまったことがある。その時の私の意見は、上に書いたようなことで、「IC（集積回路）が先端産業だということではなく、ICでも先端を走っているものも遅れたものもある」ということであったが、全く馬鹿にされてしまった。

その人の意見は、先端産業の基礎をつくるのがテ

クノポリス産業で、先端はICだと云われている（通産省で）のだから、テクノポリスはICをやらねばならない、ということであった。そこへ、「人材教育も理工系に片寄ることなく、文系も重視すべきだ」などと云ったので、一層軽蔑されたのであった。

コムスンの話を聞いて、「これこそ先端産業だ」と思いながら、変な昔話を思い出してしまった。

今やサービス産業の新商品が、何兆円産業の扉を開くというところに来ているのである。それに対して、モノづくり産業は、日本にとって必要であるにもかかわらず国外移転によって空洞化しつつある。こうなれば日本では、モノづくりへのサービス業（研究開発産業）を強化する以外の手はないのかもしれない。

2. 医療と福祉が一体となった仕事が必要だと考えたので、なんとなくこの仕事がいける気はしていたが、“株式会社で福祉をやるなんて”とケンモホロ口な扱いをうけた

おそらくこの稿を読んでいただいている方でも、「福祉を商売にするなんて」と思って異和感をもっておられる方もあると思うので、逆に、私は一寸過激な言葉で書くことによって、問題を鮮明にしようとしている。それが“商品”だとか“開発”だとか“品質管理”などという言葉になって表れている。「こんなことが商売になると思いませんか」と榎本さんに対しても、私は挑発的な言葉を使った。それに対して“商売”という言葉を使うのを楽しむように返事されたのが、上にあげた見出しである。それ以後も私は、儲かるかとか売り上げはいくらかとか、利益は出ているかなどといった質問をくり返した。

㈱コムスの会社概要は別掲した通りだが、その中にも売上高だとか伸び率とか云った文字が見える。実に真面目に商売として、ということは客と対等な立場に立って商品（サービス）を買っていただくという、民主主義市場経済の仕事をしよという考えを表している。

「今年も黒字になりました」といわれたが、現在40人の常勤と30人のパートで、総売上げが2億3千万円（会社概要とは少しちがうが、これは'95年3月に聞いた数字）で、1人当りの売上げや減価償却費を見込んだら、何ほどの“儲け”が見込めるというのだろうか。しかし、「今年も昨年に続いて黒字」という言葉に、並み並みならぬ“商売にする”という“思い”を聞くことができた。

スタートは3人だったが「何かこの仕事はのびる気

㈱コムスン 会社概要 1994年度版

1. 創立
1988年(S63)4月
医療・保健・福祉の統合と連携を目標として設立する。
COMSN (Community Medical Systems & Network)
2. 機 構
本 部 福岡市(登記)
本 社 福岡市、北九州市
3. 事業規模
資本金 600万円(96年度1,000万円)
売上高 25,000万円(94年度見込み)
(日経ランキング 第12回サービス業総合調査 93年度 在宅
介護・入浴サービス部門 売上高6位、伸び率2位)
介護用車両 7台、移動入浴車 6
職員数 63名 内訳: ヘルパー 49名(看護婦資格者 17名)
(正職数 36名) ソーシャルワーカー 3名
4. 事業内容
在宅介護サービス事業 福岡市、北九州市、久山町、志免町
在宅入浴サービス事業 福岡市、北九州市、直方市、久山町、志免町、粕屋町
教育研修事業 福岡県ヘルパー養成研修指定機関
受託給食事業 シルバーサービス振興会従事者研修指定機関
介護機器販売レンタル (準備中)

がした」ということで株式会社でスタートした。これは商品開発の原点だと思う。モノづくりでも「新商品開発に行きついたら、自分のほしいものを作って売れ」という言葉があるが、福祉サービスの商品開発でも同じだと思う。自分が将来年寄りになったときの不安を商品化することが、自分のほしい商品である。榎本さんがコムスン以前に病院経営への参加の過程で感じられた、「医療と福祉の連携が必要だ」という思いが、冷静に自分がよいと思う商品を開発する活動であった(このコムスン以前の活動の話は面白いし、非常に示唆に富んでいるが、ここでは書くゆとりがない)。

3. 提供する側の都合に合わせてサービスするのではなく、本当にユーザー（介護をうける人）に合わせたサービス（商品）の販売が必要だ

商品開発に当っては、ずいぶん緻密な調査がなされている。

現在一般に行なわれている介護サービスは、提供者の都合に合わせてすすめられている。例えば、1日の朝9時から夕方5時までという時間帯で行おうとすれば、巡回するようなシステムができていないので、ヘルパーサービスは午前3時間、午後3時間のよう形態にならざるをえない。この内容を分析すると、約70%介護に関連したサービス（家事援助サービスが44.7%、コミュニケーションが23.8%）で、本来最も必要な、高齢者への身体介護に費やされる時間は、3割しかないことになっている。ヘルパーの時間コストが1,600円/時間で仮に昼食の準備をもらったとすると、4,800円の肉ジャガになってしまうこともある。たしかに掃除やコミュニケーション

も大切であるが、高齢者の身体介護を第一に行うシステムであるべきだ。現実には、3時間となると、滞在時間内で余った時間の費やし方に苦勞することもあるようだ。このような事情から要介護者の家族が、身体介護だけでなく家事援助のお手伝いしてもらえんと思っているケースもある。

このようなことは、公共がやるのではなく商品経済に組み込まれるとなくなるものであろう。高齢者介護の合理化を行わずに、税金の負担をどんどん上げていくというようなことは、到底国民的合意がえられない。

巡回介護サービスシステムでは、家事援助の割合は13.4%となり、身体介護である清潔や排泄の援助などの比重が77.1%となっている。こうなると、正に身体介護のプロであり、お手伝いさんのように見られて、むなしさを感じることもなくなる。

こういう仕事のチェックをして、サービスの商品規格をはっきりさせることが、プロの確立につながる。コムスンはこのところをやっている。

介護のタイムテーブルの例

	0:00	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24					
家族(夫)	就寝←									起床→									朝食						夕食					
本人	就寝←						起床→						朝食						夕食											
(従来の) 各種サービス										隣人												(火・木・土)ホームヘルパー訪問看護								
巡回介護																									→火・木・土訪問なし					

関係機関の役割・サービス内容	巡回介護のサービス内容
<ul style="list-style-type: none"> ・往診：1～2回/W ・訪問看護：入浴、褥創処置、リハビリ ・ホームヘルパー：入浴（共同で）、掃除、洗濯、オムツ交換 ・民生委員：（電話呼び出し・朝7:00の訪問にて） ・隣人：オムツ交換、排尿介助 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーティング ・排尿介助（ポータブルトイレ又はトイレにて）、陰部清拭、水分摂取、食事の促し ・時間により＞—12:00、18:00の訪問時— ・義歯洗浄、モーニングケア、イブニングケア

4. 福祉分野におけるボランティアとプロとの関係はどうしたらよいのだろう

このことについては、あまり話を聞いていないが、示唆になることはあった。例えば、役所の行っている公的なヘルパーは時間単価が安いので、民営のヘルパーより安く見え、注文はそちらへいってしまうというような話だったように思う。

私は、コムスンによる介護の商品化ということが、介護対象者とヘルパーの位置を平等の立場におくことになるということと、商品の品質向上（サービスの向上）を、常に意識せざるをえないところに置くという意味で、極めて重要な意義をもっていると考えられる。

したがって、この間に、ボランティアが介在することになって、平等でないけれども、当面は安い介護を選択することになり、介護労働の商品化が行き詰まることを、最もおそれている。

日本中の老人が安心して、長期的には安く受益できるようにするためには、商売として市場経済の中で鍛えられることが最良の道だと思うので、ボランティアとプロの関係を心配している。

ここでもコムスンの提案があって、民間による巡回介護と、公的もしくはボランティアによるヘルパーの滞在介護という組み合わせが出されている。

風呂に入れるとか清潔・排泄の世話などは相当の訓練が必要だろうが、話し相手とか本を読む、あるいは掃除などはそこまでの訓練がいらないかもしれない。これらの組み合わせをうまく利用すれば、一層リーズナブルな値段でサービスがうけられるようになると思った。

5. 福祉は続かなければ意味がない。“続く”ためのシステムこそ真の福祉体制である

20年ほど前に、革新首長のいる町で審議会に引張り出されていた。私も、なんとなく、福祉予算偏重を気にしていたが、そのとき高齢の委員からギツイ一発が飛んだ。「福祉々々云うけど、すぐ財政破綻するような福祉はない方がいい、福祉やるなら“続く福祉”をやれ」というものであった。

福祉のシステムや福祉税などについて、なんとなく耳聞こえのいい話ばかりの中で、このコムスンの詳細な現場での調査にもとづいた商品計画は、“続く福祉”の基盤を作るものとなる。

このシステムと公的介護保険が結び合わさって将来の在宅福祉や施設福祉が、われわれの負担可能なものになることを期待している。

6. 九州は福祉の先端産業の基地になり、全国を導く先進地になるべきではないか

「九州の先端産業は地域福祉」ということを「やぶにらみ九州論その2 (1993.11)」で書いて以来気になっていたが、コムスンがその先鞭をつけておられて意を強くした。

九州という土地柄はサービス産業に向いているように思う。

15年ぐらい前にのことだと思うが、福岡で車で移動していたとき、ウエストというロードサイドの飲食店があった。これは多種の業態（たとえばうどん、すし、洋食などといった）が駐車場などを共用して同じ場所に立地するもので、客にも便利で、店の側も多く客を呼び込めるという、好条件をもたらすものである。これを見たとき、他にもあったかもしれ

ないが、私は、「これは新産業だな」と思った。それ以来、サービス業については関西や東京などと比べて、はるかに充実していることを実感しつづけている。サービス業以外にも福祉産業の“特産地”になる条件は多い。

産業立地の原点は、地域のもつ“持味”であり、他の地域との“つながり”である。私はこのことを「あるものいかす・つながりつくる」と云っているが、九州は持前のサービス体質に加えて、農業、漁業、気候など福祉産業に向けた条件が多い。この条件を、活性化させるシステムを開発し（コムスンが先頭に立ってやっている）、他地域とのネットワークを強めて客を呼びこめば、九州の基幹産業になりうる。

忘れてはならないことは、この産業は機器製造というモノづくりから、通信情報産業などへも巾広く波及することである。自動車などといったものと全く比較にならないぐらい裾野の大きい巨大産業の誕生を期待したい。

7. 最後に「コムスンさん、こんなしんどい、いやらしい仕事の会社に、よう従業員が集まりますね」と聞いてみた

本当は、この私の質問の仕方はかなりの褒め言葉であり、少しは羨望もまじっていたのだが、聞いている人からみたらキツイ言葉に聞こえたと思う。榎本さんは一緒に来ていた若い女性を指して、「今年入った人に聞いてみてください。どう思った?」と話した。さすがに、こんな挑発的な質問には声が出なかった。「だけどいい仕事ですよ。お客さんには喜ばれるし、3人の観音さんといって拝まれることもあるぐらいですし（3人1組で巡回している）。また新しい仕事を開拓するパイオニアの役をしているという

充実感があるし、勉強にもなるし、その上お金までもらえるんですから」といったのは榎本さんの間わず語り。

楽しい仕事で人を雇うのではなく、給料や待遇で雇うようになったら、「経営者として墮落だな」と思う一時であった。（糸乗 貞喜）

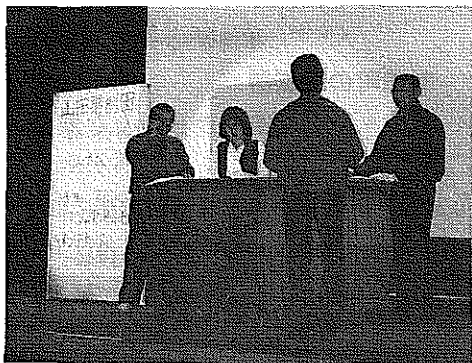
やまだ・楽しいまちづくり発表会

福岡県山田市で昨年、市の呼びかけと市民の応募により「やまだイメージアップ委員会」が結成され、その約半年間の活動の成果として3月26日（日）に「楽しいまちづくり発表会」が行われた。

委員会の半年間の活動をざっと振り返ると、結成は昨年8月。月1回の定例会のほか、9月には「やまだぶらぶらよかとこさがし」（よかネットNo12にて紹介）で委員が市内を散策、11月には市民も参加して「やまだウォークラリー」を開催した。12月には2班に分かれて愛媛県の内子町・五十崎町、愛知県の



「ボクやワタシが考えた山田の未来像」
小学生が描いた炭鉱の穴を利用した施設づくりの絵



演劇による発表もありました

足助町にて先進地視察を行った。今年に入ってようやく委員自らの夢と意見で動き始め、テーマごとに4つのグループに分かれて話を進め、発表会もその4グループで行うこととなった。

〈なぜ子供は都会に憧れる？〉

発表会はステージでの発表と料理コンテストと、内容的には2部構成。ステージの部では、まず市内の小中学生5人による「はくらの夢、わたしの夢」の発表。小学生が、自分の描いた山田市の未来予想図をバックに、こうなったらいいなあという夢を語った。

小学生の発表を見て思ったが、今の子供たちは、緑が減る、自然が無くなる、という危機感はあるようだ。しかし都会的なものへの憧れも大きいようで、高層ビルや空港、タワーなどが描かれる。子供の都会志向というのは、だまってもそうなるのだろうか、それとも社会環境がそうさせるのだろうか。

その中で、炭鉱で掘った穴を利用した施設づくりという、やや異色の絵があったが、変な都会指向がなく印象的だった。

次に委員によるまちづくり発表が行われた。各班の発表の概要は次の通り。

①「西暦2045年」

50年後の山田市の、ある家族の対話。50年前の汚れた山田川は、住民が自らゴミを拾い、花を植えていくことできれいになった、という話をする。現代の我々は、例えば空き缶拾いなど出来ることから始める必要があると説く。

②「サッカーでまちおこし」

市内でサッカーの指導をしている西野浩氏が、過去には九州の強豪であった山田高校サッカーの歴史と人脈を活かしてサッカー復活へかける夢、それが学校教育の再生へつながる話を語った。

③「福祉でまちづくり」

市としては最も高齢化率の高い山田で、誰もが楽しく暮らすまちづくりを目指し、「長崎でてこいランド」(本号でも紹介)を視察した成果をスライドで発表。

④「みんなで食べよう山田市果樹園づくり」

果物の木を自分で植えて自分で収穫できる果樹園をつくり、それによる市の活性化を考える。果樹園づくりをめぐる夢や問題点を演劇で発表。

スライドや演劇を交え、発表方法には楽しく見せようという工夫が見られた。しかし、技術的な面を含め、ややアピール不足だったかなという気はした。
(名物・名人誕生するか～料理の鉄人コンテスト)

ステージの部終了後は、休憩をはさみ「料理の鉄人コンテスト」が行われた。まちづくり発表会をなごませると同時に、市内の名物・名人を発掘するという目的もある。

参加したのは市内に在住、または勤務している18人(組)による18品。「肉じゃが」「ヌカづけ」等のオーソドックスでおいしいものから「ミルクもち」「川魚の甘露煮」等工夫されたものまで様々。ちなみに



左：料理の鉄人コンテスト
「おいしいかな？」

上：コンテストで1位になった
コーヒーゼリーぜんざい

当社からも「サクラチップによる薫製」を出品。来場した約130人の市民が審査員となって、ひとつひとつ味見し、おいしかったものに投票した。審査結果は次の通り。

- 1位：コーヒーゼリーぜんざい
- 2位：サンドイッチ
- 3位(同票)：ちらし寿司

サクラチップによる薫製(!)

子供票が多かったためか、食べやすいものが上位に並んだ。1位の「コーヒーゼリーぜんざい」は、名前はちょっとこわいが、上半分がコーヒーゼリー、下半分があずきというもので、食べると変に甘くなくておいしく、評判が良かった。今後商品化も考えるという。

後日の反省会では審査方法についての課題なども出されたが、今回は参加させて欲しいと希望する人もいるらしく、今後より多くの市民を巻き込んで盛り上がりそうな楽しい企画である。料理コンテストは年1回と限らなくてもいいのでは、という気もするが、ともかくぜひ続けてもらいたい。そしていつか山田市民が誇れる名物をつくり出して欲しい。

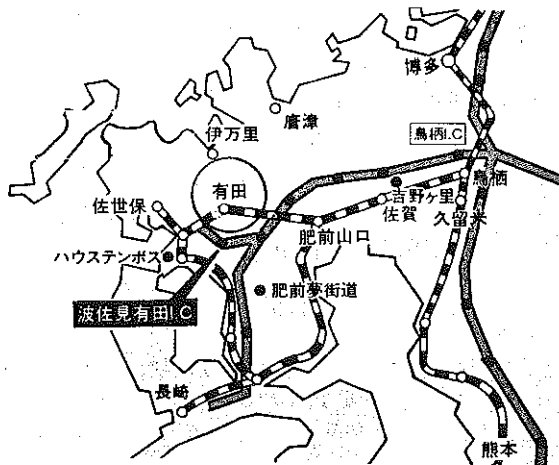
(伊藤 聡)

事例研究－地方産業の形成

有田町の陶磁器

製造業から新たな展開

有田町は、佐賀県の西部、西松浦郡に位置し、北側に伊万里市、南側に長崎県佐世保市、波佐見町との境界を接する町である。長崎自動車道の波佐見・有田インターチェンジは、町の南側の波佐見町側にあるが、高速道路の開通により福岡方面からの観光客も多く、年間約150万人の流入があり、このうちの半分は陶器市（毎年4/29～5/5）に訪れる人々で占められている。



今回の地方産業の形成は、この有田町の陶磁器産業のなりたち、形成の歴史をとりあげてみた。

〈窯業圏域のなりたち〉

有田焼、伊万里焼など「肥前もの」「西もの」と呼ばれる陶磁器は、佐賀県西部から長崎県東部にかけての2市6町（佐賀県側の有田町、西有田町、山内町、

伊万里市、嬉野町、塩田町、長崎県側の波佐見町、佐世保市三川内)の地域で主に生産され、我が国の窯業の二大産地の一つとして広域窯業圏を形成している。

有田町を中心としたこの肥前地域一帯は、安土桃山時代に、朝鮮半島との交流の中で陶業技術がまず伝えられ、唐津風の陶器が生産されていた。これが後の磁器産地形成の基礎となったと言われている。秀吉の時代、文禄・慶長の役の二度の朝鮮出兵を終えた佐賀の鍋島直茂、多久安順、後藤家住等は、出兵後の財政建て直しのため陶器の生産拡大を目的として、陶工のグループをそれぞれ連れ帰り、多久領内に留められていた李朝の陶工李參平が、元和2年(1616)有田の泉山に陶石を発見し、上白川の天狗谷に築窯して、白磁焼成に成功したのが日本における磁器の創業であると伝えられている。

磁器焼造の開始後、有田周辺で継承されていた古唐津系の陶器製造は、有田谷の地形条件、陶石の手に入れ易さなどから、この地を中心にして、他の地域からも陶工が集まり、急速に磁器産業が形成されている。

〈伊万里焼として全国へ展開〉

肥前の焼きものが中央に広まったのは、磁器の成功後から始まったものではなく、すでに北部九州一帯の焼きものが唐津焼として京都などにも広がっていたといわれる。有田で磁器が焼造された後、全国的に有名になり、当時有田磁器の積出港であった港伊万里の名前で「伊万里焼」と呼ばれるようになった。

全国に広まったもう一つのきっかけが、柿右衛門の「赤絵」である。南山の酒井田柿右衛門の文書によると、伊万里の商人東島徳左衛門は中国人から手に入れた技法と色絵具をもとにして、赤絵付を柿右衛門に依頼、これが成功したのが1640年代であり、

当時は長崎へ持ち込み、オランダ人や中国人に売っていたと言われている。

これ以後、赤絵付技法はたちまち地域一帯にひろがり、国内だけでなく、当時ヨーロッパと中国・東南アジアとの貿易を支配していた東インド会社により、ヨーロッパへも輸出され、ヨーロッパ各地における磁器生産の開始にも大きな影響を与えたいわれている。

それまでは、中国の磁器がヨーロッパや、日本に輸出されており、日本の磁器は、安価な低級品として地位しかなかったようであるが、中国大陸での清と明の戦乱により、中国の磁器が輸出できなくなり、その結果赤絵付けに成功したばかりの日本産がその代替えとしてヨーロッパ各地へ拡がることになる。

〈陶磁器製造の国内最初の近代化〉

明治維新、廃藩置県に伴い、藩窯制度や藩による保護・統制がなくなった結果、誰もが自由に磁器を製造し販売できるようになり、窯業に関連する各分野において西洋の考え方を積極的に導入され、近代化が行われた。幕末には窯焼き133戸、赤絵屋16戸だったものが、窯焼き206戸、赤絵屋約50戸へと急増しており、2千人以上の人々がこの地で働いていたようである。

陶磁器製造の近代化は、この地域が国内でも最初に行ったといわれ、碎石機や製陶機械の導入をいち早く行った精磁会社や日本における最初の会社組織である香蘭社(1875年)が設立されている。この近代化のきっかけとなったのは、1867年のパリ博覧会への出品といわれ、市場の拡大により生産技術の導入が要求されたことによるものである。

〈有田磁器の地位の維持〉

江戸時代から藩の保護・統制のもとに陶磁器の製

造が進められていたが、全国への出荷、海外への出荷のためには、注文を受け、商品として販売し、代金を回収する機能として問屋のめざましい活躍が見られる。主なところでは、筑前芦屋（福岡県遠賀郡）、紀州箕島（和歌山県有田市）など数多くの商人が、商品を伊万里の問屋から仕入れ、全国に販売していたと言われている。箕島の商人がなぜ有田磁器を取り扱ったのかは、町史によれば、黒江塗（和歌山県海南市）を九州で販売するために訪れたことがきっかけとなり、江戸でも販売されるようになったそうである。

〈品質保持、近代化に向けて〉

全国に販売され、藩のドル箱的な存在になった有田磁器は、藩による専売制度、取り扱い商人の制限などの統制を経て、明治維新後は自由な商業活動が実現されたが、製造家の乱立により、粗製濫造が引き起こったため、窯業技術の教育を目的とした日本最初の工業学校「勉修学舎」（1871年、現在の有田工業高校）が地元有志の寄附によって設立したり、松方デフレ政策による深刻な不況のため、製陶地区の製品協定としての陶業盟約（1866年、後に同業組合の設立に至る）が結ばれたり、さらに現在も続いている有田陶器市の発端となる有田品評会（西松浦郡陶磁器品評会1896年）の開催、その4年後にはパリ万国博覧会へ出品されるなど、品質向上、技術改良のための様々な策が行われてきている。

また、近代化のための設備投資に必要な資金の確保のため、1888年、有田貯蔵銀行（現佐賀銀行）、1892年、協立銀行が設立され、磁器製造における金融体制も整い、近代企業としての活動も本格化している。

当時の有田磁器の製造業は、明治政府の殖産興業政策の代表的な産業として進められ、前田正名によ

る1884年の「興業意見」においても、機械の導入による近代化が強く主張されている。さらに、大隈重信は、1896年の泉山での園遊会の席上で窯業振興を訴えるなど、輸出の低下、瀬戸・美濃による追い上げなどによる有田磁器の不振からの脱却が期待されていた。

〈窯業を支える家内手工業〉

1897年（明治30年）頃の陶磁器の売上高24万円に対して、原材料の陶土約7%、労賃31%、薪材15%、窯掛雑費・他雑費が約15%、純益12%という構成であり、コストダウンのための生産技術、機械の導入が求められていた。さらに、全国の陶磁器製造体制も零細であり、1903年（明治36年）の内国勸業博覧会での陶磁器業の改善すべき課題の中での指摘でも、全国5100戸余りの製造家に対して、約24千人の職工であり、戸当たり4~5人の家内手工業が大部分を占めていた。当時の佐賀県窯業の従業者規模では、80~100人規模が2カ所（香蘭社は99人、精磁会社85人）、40~50人2カ所、30人1カ所、10~20人24カ所となっており、比較的窯業企業は中企業でもあり、窯業振興への期待も高かったと思われる。

現在の有田町では、製造業従業者3,958人（1992年）のうち、窯業関連製造業は3,419人、86%を占めており、1991年事業所統計調査では、民営事業所299カ所、10人未満が195カ所の65%を占め、家内手工業事業所も相当数あるようである。

〈明治以降の陶磁器産業の発展と佐賀の停滞〉

1897年（明30年）の九州鉄道の早岐まで開通により、有田駅が営業を開始し、翌1898年には貨物駅として中樽停車場が開設された結果、それまで伊万里から海上輸送に頼っていた有田磁器は、鉄道輸送

へ転換し、それまで伊万里焼として全国に名が知られていたものが、有田焼として有田が生産・販売の地域として知られ、その後の発展をみることになる。大正時代には、第一次大戦による好況も手伝い、生産も機械化、効率化によって製造品種に碍子をはじめとした工業磁器などが加わり幅広いものとなっており、機械ろくろの普及、登り窯から石炭窯への転換、手工に加えて機械の導入などによる技術改良、生産能力の向上が進められる。

この時期には、全国的に窯業産業が振興される時期であり、全国の製造戸数も、1898年（明31年）の43百戸から1925年（大14年）には75百戸、1.7倍へと拡大し、生産額は、1898年4,965千円から1925年78,177千円、15.7倍へと増加している。府県別の生産額をみると、1913年（大2年）は愛知42%、岐阜12%、佐賀、京都がそれぞれ10%だったが、1924年（大13年）には、愛知41%、岐阜18%、京都6%、佐賀5%となり、佐賀、京都のシェアは低下し、他県の伸びの方が大きかった。この原因としては、濃尾地方の窯が薪から石炭への転換、鉄道利用による販売流通など、早急な近代化に対して、有田のそれらが立ち後れたためと言われている。そのため、大正末から（お）有田は、経済的には小康状態を続けたまま、昭和の金融恐慌、世界恐慌を経て、大陸への輸出によって一時息を吹き返しそうになったが、大戦勃発により戦時統制を経て、再出発を図ることとなる。

〈流通構造の変化〉

有田磁器は、江戸時代から明治の鉄道敷設までは、伊万里港からの出荷のため、伊万里の商社・問屋による流通、鉄道敷設後は、大正、昭和の戦前まで有田焼として有田地区の商社・問屋による流通がなされていた。この間、これらの問屋によって、金融・原

主要府県別陶磁器生産額（有田町史より）

計	其他ノ府県	福岡	福岡	滋賀	長崎	兵庫	三重	石川	京都	佐賀	岐阜	愛知	府県名	年別
														別
一七、 六七六	二、 三三〇	一九七	二六四	二五二	三三五	二八二	三二二	六四五	一、 七七二	二、 二〇五	二、 一七二	七、 三六三	大正二年	
六四、 六五九	五、 二二九	三三四	一、 〇四二	八三八	一、 二九五	一、 〇八二	一、 四一九	二、 三七六	四、 五二四	四、 九〇八	一、 八八八	七、 八〇三	八年	
二、 八四〇	四、 九〇六	六六三	一、 〇三二	八一五	一、 二六九	一、 二二三	一、 八六〇	二、 七一九	三、 九三七	三、 一六四	一、 五六六	一、 六三三	九年	
五、 〇六三	五、 〇六三	一、 〇一八	一、 一五六	一、 一五七	一、 二九〇	一、 五〇八	二、 一三四	二、 六六七	三、 四六四	三、 四七一	一、 九四二	一、 九三九	十年	
四、 九一六	五、 〇四二	一、 三三九	九四六	一、 六四三	一、 七〇六	一、 六九八	二、 七三七	二、 六四二	四、 〇〇三	二、 九一〇	一、 二〇三	一、 六一六	十一年	
四、 七四〇	六、 五三六	一、 七四七	一、 一〇〇	一、 八二四	一、 七九一	一、 五四九	三、 三四三	二、 三九三	四、 三六〇	二、 九八一	一、 六五二	一、 四七二	十二年	
六、 七七七	六、 七七七	一、 九五六	一、 〇一六	一、 六二八	一、 八八六	一、 六六八	三、 二五五	二、 四四一	四、 〇四一	三、 五六二	一、 四〇二	一、 八九七	十三年	

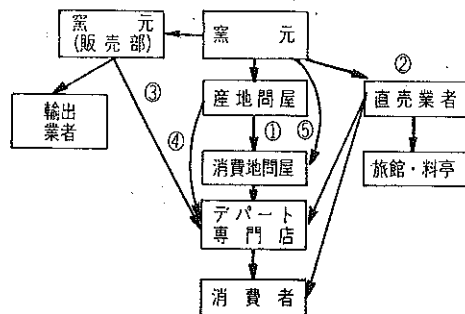
（単位 千円）

料供給機能が發揮されていたものが、戦時中の生産統制により問屋機能は地域から失なわれた。しかし、有田陶磁器の生産体制は、戦後も分散的、小規模な製造家が存在していたため、戦前のような金融・原料供給機能の復活とまではならなかったが、新たな流通形態も誕生し、戦後は次のような流通経路となっているといわれている。

〈2万人の地域を支える陶磁器〉

これらの陶磁器製造業、卸売業、小売業など、町で働く人々は現在どうなっているのかを、有田町の

有田焼の流通経路（有田町史より）



- ① 有田焼産地の最も一般的なケース
 ② 直売業者の販売形態
 ③ ㊦組合未加入企業や窯元の販売形態
 (柿右衛門, 今右衛門など)
 ④, ⑤ 最近の新しい販売形態 (規模は小さい)

資料から整理すると次のようになっている。

居住人口14千人のうち、約6千人が町内で働き、さらに町外から約4千人の就業者が通勤している。これを5年前の国勢調査での産業別就業者、従業者でみると（1990年にはこの表がない）、製造業の流入超が1,481人で最も多く、次いで卸・小売の688人となっている。

1990年国勢調査

人口 (居住人口)	13,826人
うち就業者	7,376人
うち町内就業	5,915人
昼間人口	16,485人
うち就業者	9,882人
うち町外から	3,967人
一日の人口流出入差	2,659人
うち就業者	2,506人

常住地、従業地による就業者数（1985年）

単位：人

	常住地による就業者	従業地による就業者	従業者と就業者の差
第1次産業	124	127	3
農 業	122	125	3
林 業	1	2	1
漁 業	1	—	-1
第2次産業	3,552	5,148	1,596
鉱 業	5	8	3
建 設	351	463	112
製 造	3,196	4,677	1,481
第3次産業	3,729	4,417	688
卸売・小売	2,244	2,672	428
金融・保険	136	216	80
運輸・通信	223	326	103
電気・ガス	25	11	-14
サービス業	905	1,015	110
公 務	196	177	-19
分類不能	2	2	0
総 数	7,407	9,694	2,287

ここで、窯業に関連する従業者がどの程度いるのかをみでみる。直接的に関係するのは、窯業製造業と販売に関わる卸・小売業であり、町の資料による工業統計ベースでは、1992年の製造業従業者のうち窯業関連従業者は、ダンボール製造や印刷業など窯業に関連する従業者までを加えると、90%が窯業関連製造業に従業しており（出荷額では86%）、1991年の商業統計では、卸売業従業者の86%（販売額でも同率である）、小売業従業者では40%（販売額は42%）、両方あわせると商業関係では60%を占めている。したがって、町で従業する製造業従業者（上記）

県別の陶磁器関連製品出荷額の上位5県

単位：百万円

製品	全国 出荷額	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	備考
陶磁器製 和飲食器	129,666	46,981 岐阜 36%	29,810 佐賀 23%	17,693 長崎 14%	11,519 愛知 9%	6,145 京都 5%	
陶磁器製 洋飲食器	108,664	52,706 岐阜 49%	24,366 愛知 22%	12,993 三重 12%	8,454 石川 8%	4,121 佐賀 4%	
陶磁器製 置物	45,850	17,822 愛知 39%	8,563 佐賀 19%	3,803 岐阜 8%	3,656 滋賀 8%	2,169 石川 5%	
陶磁器 絵付品	28,078	20,195 岐阜 72%	5,412 愛知 19%	1,056 石川 4%	825 長崎 3%	191 京都 1%	佐賀
陶磁器用 はい土	45,801	26,937 岐阜 59%	13,202 愛知 29%	2,309 佐賀 5%	1,351 滋賀 3%	427 三重 1%	

資料：「工業統計表一品目編」

のうち90%として42百人、卸・小売業従業者（12頁右欄表）の60%として16百人、合計58百人が窯業製造・販売の直接雇用者であり、これに付随するサービス従業者などを考慮すると概ね7千人程度の就業の場を創出していることになる。これらの従業者の家族まで含めると20千人規模の町を支えているといえる。

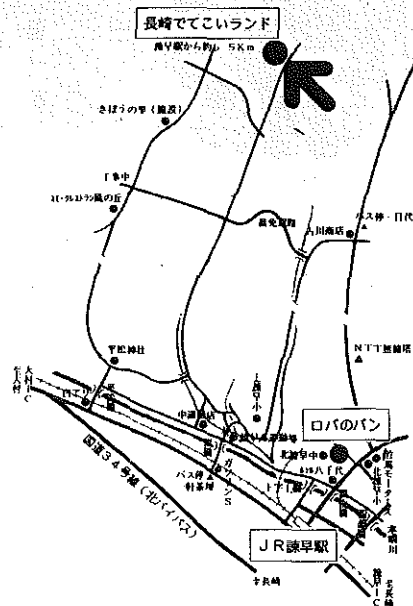
〈これからの陶磁器〉

1991年の佐賀県の陶磁器製造品出荷額の全国シェアをみると、和飲食器では岐阜に続く第二位、洋飲食器は第五位、置物は第二位となっているが、陶磁器全体において一時期のように高級品が売れなくなり、徐々に陶磁器の売上は低下しており、陶磁器の製造・販売だけに頼ってられない状況となっている。しかも、中京地区の企業などは既に東南アジアへ生産をシフトするなど、大量生産による低価格の陶磁器製品の輸入が今後も益々増加することが予測され、有田の陶磁器生産地としての新たな展開が求められている。

400年の伝統と文化を持つ有田が、これら歴史的な産業・技術資源、現在の資源をこれからどう生かしていくかがこれからのまちづくりの課題となっている。

（山辺 真一）

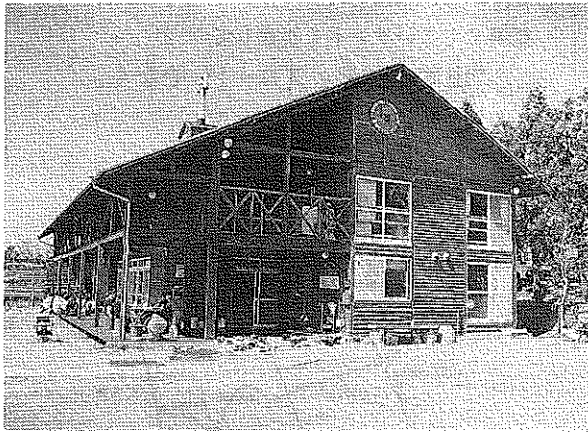
長崎でてこいランドを視察して
“出ずに（ディズニー）”でなく、
“出てこい”を目指して



当施設は2～3年前から気になる存在であり、機会があれば是非訪れてみたいところのひとつであった。福岡から九州自動車道にのり、約1時間半で諫早市に到着したものの、少しわかりにくい方向からアクセスしたらしく、目指す施設まで山道をウロウロすること約30分、やっと「でてこいランド」に辿りついた。そこはログハウスの建物がちょっと開けた丘陵地にひっそりと建っていた。

〈賛同者の支援だけで建てられた施設〉

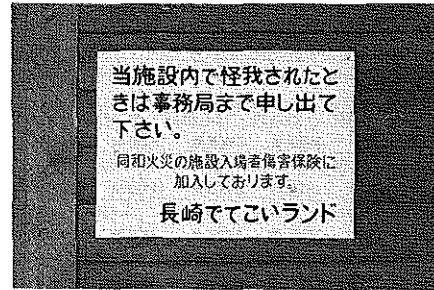
この施設設立を思いついた光野さんという方は、長崎県佐世保市の出身の木工デザイナーであり、元々



ログハウス (のびのび館)

東京の方で障害者の方々のための椅子や道具を製作されていたとのこと。そこで東京にはディズニーランドはあるが、ここは障害者などハンディキャップを持っている人が自由に遊べないところであると思ひ、それならばハンディを持つ人、持たない人も共に遊び、共に学ぶ場を創り、誰でも「出てこい」と呼びかけられるような施設にしようという思ひを込めて設立されたとのことであった。当初は東京で創る予定であったが、自分のイメージのものを創るには広い用地が必要ということもあり、長崎に戻り、ミカン園であった約5,000坪の用地を買収し、建設に至ったとのことであった。用地費や建設費については光野氏の考えに賛同した地元の建設会社の社長さんが東京のマンションを売り払い、用地費や建設費に充てたとのことであった。東京のマンションの1戸が5,000坪の敷地に転換できることを考えると、やはり東京は偉大である。

当施設は全く公的な援助は受けてなく、障害を持つ子供の親や支援者たちが力を出し合い、施設の運



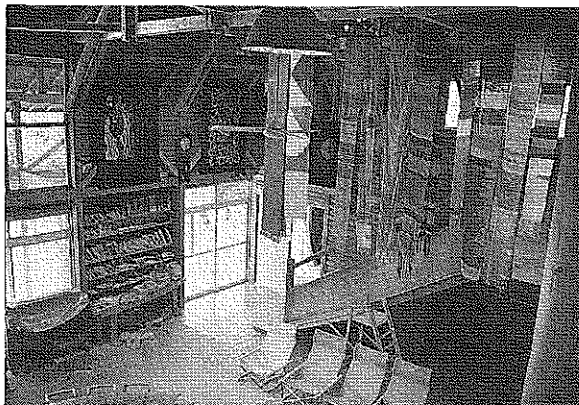
これも入場者への細やかな気配りのひとつ

営にあたっている。玄関口には法人会員の名簿を並べた塔が建てられており、また、施設内個人会員の名簿が壁に掛けられている。ちなみに法人・個人会員数は合わせて480ぐらいとのことであった。

〈何かしらゆったりできる雰囲気漂う施設〉

5,000坪の敷地内には、メインとなっているログハウスの建物(のびのび館)、後で増築されたログハウスの露天風呂棟(ゆうゆう館)、自由広場、大きなブランコや傾斜地があるわいわい広場、ロバ、リス、ヤギ、アヒルなどを集めた子供動物園や工作広場などが配置されている。のびのび館では、先ず中に入ると約30坪の2階まで吹き抜けとなっているホールがあり、このホールを中心としてトイレ、浴室、宿泊室が配置されている。ホールには2階から色鮮やかな布地が吊り下げられていて、自由な雰囲気を醸し出している。この布地の製作者は知恵おくれの中学1年生の子供が紡いだとのことであり、その色彩感覚には感動させられた。

施設内のトイレは、もちろんバリアフリー化されており、2箇所あるうち1箇所は下肢が不自由な人でも這って自力でできるように便器が床面と同レベルに設置されていた。また、浴室は車椅子の人でも自力で浴室へ行けるように脱衣室の床面を一段高くし



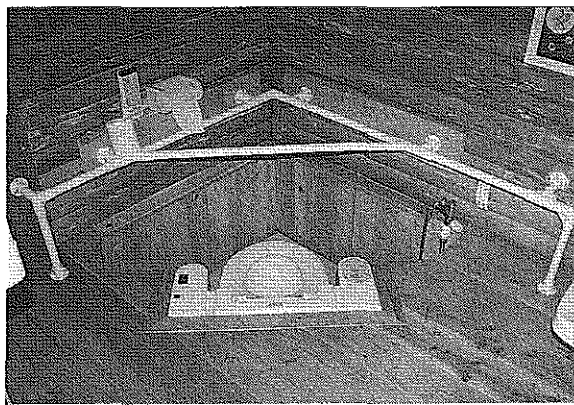
色鮮やかな布地がかけられている吹き抜けのホール

てあり、この施設は、障害者であっても、自力でできることはできるだけ自分でできるようにしようという考え方が徹底しているように感じられる。

当施設は宿泊が可能だが自炊が基本となっており、宿泊費は1畳300円、浴室使用料1グループ1,500円と安価である。親子4人で8畳間に寝袋持参で宿泊しても2,400円なのである。当施設内では最大170人ぐらいの宿泊が可能であるとのことで、去年は年間利用者5~6万人、うち宿泊者1~1.5万人とのことであった。我々が訪れた日にも諫早市内の園児たちがお別れ遠足とかで、でてこいランド内を自由に遊び回っていた。

〈長崎でてこいランドを核として広がる施設〉

案内していただいた女性の方の話で特に興味深かったのは、でてこいランドの仲間が集まってホラ吹き大会（普通は「なべ会」といっている）を定期的に行っていて、みんなのこれからの夢やホラを、鍋を囲んで語り合うらしいのであるが、この中から障害者が働けるようなパン屋ができないかという話が持ち上がり、それならと賛同した6家族が共同出



下肢が不自由な人でも自力で使えるトイレ



一段床面が車椅子分だけ高くなっている脱衣室

資して「ロバのパン」というパン工房を設立したとのことであった。この工房には現在、2人の障害者の方が働いている。また、当工房の販売店であるドンキワールドという店を市街地内で営業している。長崎でてこいランドは設立後5年を経過したとのことであるが、この期間のうちに全国から共鳴者が集まり、各地で「でてこいランド」の輪が広がっている。現在、北海道津別町、京都でも「でてこいランド」が設立され、福岡県は原鶴温泉からもこのような施設を創りたいと相談に来られたとのことであった。

〈出てきやすくするために、やはり市街地内が理想だが〉

「でてこいランド」を視察して最後まで疑問であったのが、やはり場所の問題であった。当施設はやはり車でアクセスを前提としており、高齢者など車を運転できない人には行けないところである。誰もががきやすく行ける場所であるためには、やはりバ

ス停からあまり離れていないところが理想のように思えるのである。しかし、現実には用地費等の問題のため山中になってしまうのであろうが、場所や交通手段について何か公的な支援ができないだろうかと「でてこいランド」を後にしながら考える次第であった。

(山田 龍雄)

お 知 ら せ 第3回よかネットパーティのご案内

◆日 時

平成7年6月2日(金) 17:00~

◆場 所

榑九州地域計画研究所 福岡市中央区天神1-15-1
TEL.092-731-7671 FAX.092-731-7673

◆参加条件(下記のいずれかをお願いします)

- ・うまいもの、うまい酒持参
- ・うまいもの、うまい酒の話
- ・うまいもの、うまい酒の推薦
- ・参加費 500円

今年も「よかネットパーティ」を企画しています。「うまいもの」を楽しみながら、ネットワークづくりができる、そんな場にしたいと思います。

皆様のご協力で、去年はたくさんの品が集まりました。今回は、「うまいもの自慢」の時間をとって皆様に思う存分自慢していただく予定です。よろしくお願い致します。

その他にも、博多にわか、「うらしま太郎」体験など、楽しい企画を考えておりますので、どうぞご参加ください。

※参加のお申込は同封のハガキをお願いします。

〈昨年のパーティから〉

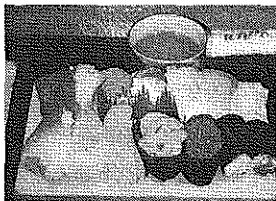


“博多にわか”に所員も参加しました



大盛況、多くの出会いがありました

食場日誌

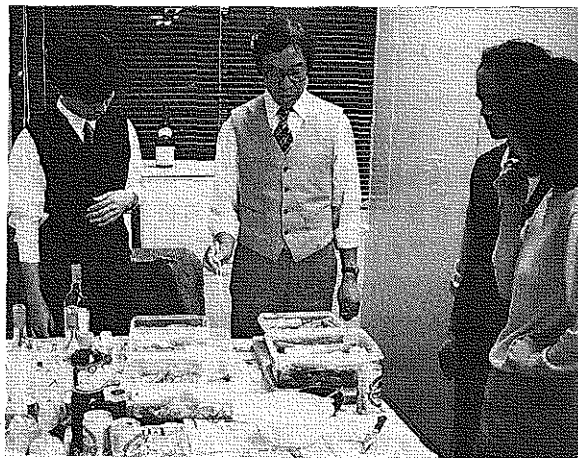


寿司定食千円、5席をあらそって行列ができる

・3月×日 たびたび登場している長崎市大黒市場でみつけたうまいもの。「大黒寿司ひらの」の寿司定食。ここの寿司は大きくて重い。パクッと食べようとするとネタが口からあふれてきて、まるで自分が舌をペロッと出したような状態となる。ここでのおすすめは意外にも海老である。待っている間も退屈させない心遣いからか、店内の至る所に張り紙がある。「女性に限り年齢26、B85、W60、H80、体重52kg、ズバリ賞100円」「営業はPM12:00~PM1:30までよ」「便利でオトクなお食事回数券発売中」など。店長の趣味で思いついたとしか考えられないが、今度行って根ほり葉ほりきいてみようと思う。(な)

B2	明太子 福太郎	和菓子 大原松露鐘頭	喫茶 菊竹珈琲堂
	寿司・和食 博多・すし幸	軽食 ブルネール	軽食 ロッセリア
	洋食 ロイヤル	喫茶手打うどん	洋食 MR&MRSジョージ
	お好み焼 六甲	coffee&pasta Hanasaki	酒類と豆蔵の店 梅の花
	DPE DPE-SERVICE	移動電話 フレリユード	薬局 アネシス
	フロリスト サントワール		

・4月×日 アクロス福岡(旧県庁跡)が動き出しました。地下には沢山の飲食店がはいっています。味も値段もわかりませんが、職場の食場が広がりました。(な)



味見をしつつ下ごしらえ

・4月×日 「やまだ料理の鉄人コンテスト」(本文6頁)で3位に入賞した“自家製薫製”の作り方を紹介しよう。

薫製づくりは何ととっても下ごしらえがポイント。

①タレづくり…ワイン、清酒、タマネギ、レモン、ニンニク、唐辛子、塩、黒胡椒を味を確かめながら適当にブレンドする。

②材料…牛肉、豚肉、鶏肉、鮭、蒲鉾、ソーセージ、寒干し大根(これは漬け込まない)を①のタレに一昼夜漬け込んでおく。

③材料に針金をさし、薫製箱(これも手作り)に吊りし燻す。

この薫製を、6月の「よかネットパーティ」で味わっていただく予定なので、乞うご期待。(だ)

アジアと女性 ～地域ゼミからの報告

2月23日(木)、第36回地域ゼミに熊本学園大学社会福祉学部教授であり、アジア女性交流・研究フォーラム研究員の篠崎正美さんをお招きして、日本を含めたアジアの社会について、「アジア女性交流・研究フォーラム」の活動についてお話しいただきました。以下「アジア女性交流・研究フォーラム」の活動を中心に報告をさせていただきます。

〈アジアと女性に注目〉

・(財)アジア女性交流・研究フォーラムは1990年10月に北九州市の「ふるさと創生事業」として設立された。

・人間の尊厳の問題である「女性の問題」は社会全体の共通の問題である。アジアの人々とともに女性問題について理解を深めることは、国の開発の推進と開発における女性の参加が重要になってきているアジア地域の発展、国際協力や平和に大きく寄与するものである。

〈まなびあう、ふれあう、たすけあうをテーマに活動〉

- ・市民レベルでアジアを知ってもらうためのセミナー、シンポジウムの開催
- ・国内外の研究機関と共同で、アジアと女性について調査、研究
- ・情報誌「AsianBreeze」の発行
- ・書籍、情報誌、ビデオなどを収集し、広く情報を公開
- ・海外通信員や各国の政府機関、NGOと情報交換を行い、ネットワークを構築

〈ゼミに参加しての感想〉

篠崎さんはずっと女性学を専攻され、日本の家族関係の基礎である母子のつながりをあまり重要としない欧米モデルではなく、アジアの女性について研究することに魅力を感じてこのフォーラムに参加されたということである。そして経済成長の中でのアジアの人々の生活にスポットをあて、韓国、タイ、中国、そして今年はマレーシアと毎年調査・研究をされている。それぞれ異なる言葉や習慣の中で女性学での共通情報が大変役だっているということだった。

中国や韓国などアジアの女性についてうかがったが、各国の状況の中でそれぞれであり、アジアの女性としてひとまとめにすることはとてもできないようだ。しかし、社会の変化につれて女性の位置も変わってきている。日本でも、性差別やセクシャルハラスメントということばを耳にする機会が増えた。これは、男性女性ともに以前よりも考えるようになった、あるいは意識せざるをえなくなったということではないかと思う。男尊女卑、性差別、フェミニズムといったことば自体に対する認識にもいろいろあり、この問題に関してはもっとじっくりと、ともに話し合う必要があると思った。(富重 慶子)

ツボの話 ～地域ゼミからの報告

3月2日(木)の地域ゼミは、「鍼灸師がツボを語る」異色のゼミであった。講師は10年前より福岡市南区で鍼灸院をされている筑紫城治さん。

スライドを使いながら、普段は馴染みのない、実際の治療でも使っている使い捨て鍼、金・銀製の刺さない鍼(ツボを探ったり、治療したりする)など

の実物を触らせてくれたりと、非常に具体的で分かりやすいゼミだった。

話は鍼灸の話を中心に、東洋医学と西洋医学からホログラフィ理論まで多岐に渡った。

〈近代医学＝能力代行、東洋医学＝能力サポート〉

氏はまず、近代医学と東洋医学の違いから、鍼灸とは何かを説明。その違いを簡単に表すと次のようになる。

近代医学＝人間の治癒能力を代行する。

東洋医学＝人間の治癒能力を高める

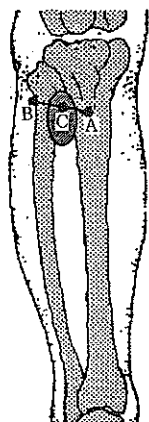
具体的には、バイ菌が体内に入ったり、炎症ができた場合、人間は本来持っている自然治癒力（白血球・抗体の結集、皮質ホルモン分泌）で対応する。この能力を、抗生剤やステロイド剤の投与によって「代行」するのが近代医学、ツボの刺激によって高めてやる（サポートする）のが東洋医学ということになる。

〈鍼治療は「初期治療」〉

よって、東洋医学は初期治療に効果を発揮するもので、鍼などによるツボの刺激で風邪の初期症状は治まってしまうらしい。筑紫さんの家族は風邪で医者にかかることはないという。

〈健康の基－三里のツボ〉

最後は健康維持のためのツボを実際に教えてもらう。このツボは「三里のツボ」とい（下図参照）、松尾芭蕉『奥



足三里のツボの位置、探し方：膝の真下にある骨の高まり(A)と、外側にある骨のでっぱり(B)を結んだ真ん中(C)が三里のツボ

の細道』に「もも引きの破れをつづり三里に灸すゆるより」という有名な書き出しの一節を始め、古くは14世紀、兼好法師『徒然草』にも記述があるなど、古来より重要なツボとされ、この効果も現代の研究により実証済みだという。

疑問に思うのは、確かに江戸時代などと比べ、人間が歩く量というのは格段に減少したにせよ、このような健康維持のための知恵が現在まで伝承されていないことだ。西洋医学の氾濫、などと言で片付けるつもりはないが、大多数の人々に定着した「病気は罹ってから直す」という風潮はもう一度見直されるべきだろう。（北村 茂樹）

札幌市の住宅マスタープランと 北国の住宅事情についてうかがう

～眞嶋二郎先生を迎えて

3月16日、北海道大学建築工学科教授の眞嶋二郎先生による「札幌市の住宅基本計画とそれを取り巻く諸問題」の勉強会を行い、札幌市の住宅マスタープランの策定の経緯と北国での住宅事情についてお話をうかがいましたので、簡単に紹介します。

今回の札幌市の住宅マスタープランは、建設省の作成指針の通達以前に、他地域に先行して策定されたもので、計画策定に当たっては、

- ・住宅市場全体を対象とした住宅政策の拡大
- ・住宅政策の地域化多元化、総合化と視野の拡大
- ・消費者がどのようなニーズを持っているかなど市場特性の調査分析の重要性などが指摘されています。

〈防寒対策が基本〉

札幌市の住宅問題について印象的だった話をいく

つか挙げてみます。

・札幌の住宅市場圏は周辺市町村へ広がりつつあるが、他の大都市に比較すると市域内での自己完結性が極めて高く、通勤流出差が少なく、(住居が就業の場と同じ市内で確保できている)市内でのファミリー向けの賃貸住宅は7~8万円程度が相場となっている。

・住宅型居住特徴としては廊下など無駄な部分が少なく、家族が集う居間を中心に風呂やトイレ、各部屋がつながっている。これは、暖房効率を上げるためのもので、中心の居間が暖まった余力で周りの部屋が暖まるシステムになっているが、防寒技術の進歩が早く建替周期もが短くなっている。

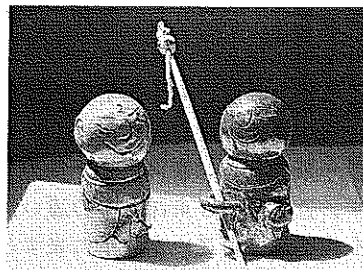
また、札幌市独自の居住水準が設定されたなど気候は違えど、住宅マスタープラン策定の参考にもなると思われ、最後に先生は「今後は、福岡など地方中心都市との連携を図ることを考えたい」とのことでした。

最後に、多くの資料を手に、遠く北海道からおいで下さいましたこと、この場をかりてお礼申し上げます。(金川 薫)

私の近況

「陶友」のお地藏様

福岡市中央区地行にある、知的障害者の方の工房「陶友」にうかがいました。こちらで発行されている「陶友通信」に次のような一文があり、すてきなことばだなあ、どんな作品を作っているんだろうと興味をもっていました。……「バリアフリー、自然には境界線がない。人と人の間にも……障害があ



耳かきの大きさでお地藏様の大きさをご想像ください

ろうとなかろうと。同じ人間。]

陶友でつくられている作品のひとつ、小さな可愛いお地藏様を見せていただきました。手に取ってみると、それぞれ表情が違い見あきることがありません。早速今回のパーティのおみやげにと注文させていただきました。(と)

■工房「陶友」 福岡市中央区地行1-15-18

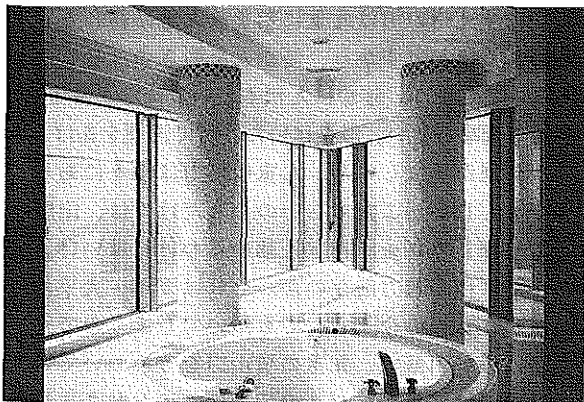
TEL. 092-722-6472

〈巨大船シーホーク出現〉

福岡ドームはもう皆さんご存知でしょう。その隣にまたも福岡の観光の名所になるであろう巨大な物体が4月27日にオープンしました(1992年12月着工)。

その名は「シーホーク ホテル&リゾート」、16世紀のカリブ海を実際航海していた船の名を用いただけあり、ホテルの形はほとんど船のようです。地下2F、地上36Fは福岡市で最も高い建築物でしょう(その隣にある福岡タワーと同じ高さ)。

1Fのメインホールから4Fのアトリウム(巻き貝をイメージ)、レストラン(30店舗)、35Fの展望中華レストランは、宿泊客でなくても利用することが出来ます。中でも4Fのアトリウムは南国の雰囲気味わえるかもしれません。



「スイートルームの浴室」…建物の角にあたる部分がガラス張りでもいい眺め、でも福岡タワーの展望室から見えるかも？

2F、3Fには結婚式場（チャペル）もありご予約のある方はいかがですか。

客室のインテリアは世界5大陸のイメージでまとめられ、野球観戦と宿泊がセットになったお得なプランも用意されているとか。

この機会にぜひ来福されてはいかがでしょう。

この他、宴会場の8ヶ国同時通訳設備、屋上ヘリポート緊急離着陸設備、30秒で36Fまで昇るエレベーター、高架水槽を用いた振り子式制振装置、厨房排水を便所洗浄水として再利用etc.。様々な最新の設備が整っているという印象でした。 (み)

〈「うらしま太郎」インストラクター初体験〉

3月25日（土）・26日（日）の両日、佐賀市で開催された「'95イキイキわくわくフェスタ」の催物のひとつである、「うらしま太郎」高齢者疑似体験のお手伝いに行ってきました。

私は25日の午前中だけ、インストラクターの服部万里子さんのお手伝いをさせていただいたのですが、実際にこのセットを付けてみて様々な変化を体験し、

またインストラクターの講座で他の人に体験してもらう場合についても指導していただいたものの、実際にお手伝いをするのははじめてで少々不安でした。ところが、思った以上に多くの希望者があり、あまり考える暇もなくまたたく間に時間が過ぎてしまいました。

体験者は比較的年齢の高い方が多く、目の前に迫る“老い”は切実な問題という感じがしました。ただ若い人と比較するとこの「うらしま太郎」の体験へのショックは少ないようで、「この位ならたいしたことはないですね。」と安心されているような方もいらっしゃいました。この体験によって、若い人は、高齢者の気持ちを理解し優しい態度で接することができるようになり、比較的年齢の高い方は、近い将来の問題としての老いをより理解することができます。今後も、より多くの人に「うらしま太郎」を体験してもらいたいと思いました。 (と)

■「うらしま太郎」セットを購入！

当事務所でも「うらしま太郎」を1セット購入しました。これを機会に様々な場で活用していきたいと思います。

〈“一升懸命”でやっています〉

よかネット13号で紹介したニホンハチミツの私版。今年の1月、対馬へ行って民宿のオバサンに聞いたところ「私の家も一升買っています」。「なんであんな高いものを買うのですか」、「なんでって3万円もするけど、子供が腹の具合損ねても少しなめさせるとすぐ治りますし」——「ハハア、ハチミツといっても、この自然のものは食品ではなく、家庭常備薬なんだな」というのが小生の感じ。同じ対馬のスーパーではピュアハチミツというのが500g（2合ぐらい）が399円だったので、1升が3万円というので少々後込みし

たが、思い切って買った。その後の気分のいいこと。「オレハ、サンマンエンノニホンハチミツヲ、モッテルノダゾ」と、どこでも手に入れる、という訳にはいかない、ニホンハチミツを持って勇んで帰った。

それ以来、朝晩スプーンに1杯(しょっちゅう忘れるけど)、大体1ヶ月で1合減る。このハチミツは1年中放置して置いたものなので、世間で高級品といわれているピュアなレンゲハチミツとかトチのハチミツなどといったものと比べても話にならないくらい味も香りも自己主張が強い。3万円が高いとは思えなくなる。高級品ではないが高品質だ。なにごとに寄らず、高級(値が高い)ではなく、高品質を追求したい。(糸)

フレッシュマン紹介



久本泰正 (23歳)
岡山県岡山市出身
山口大学工学部
社会建設工学科卒

常識破りな切り口でまちづくりに取り組んでいた。最近興味があるのが社会学。実行しているのがダイエット。

みなさんはあの名犬平治号を知っていますか。

九重といえばもちろん大分県の九重連山のこと。その九重にガイド犬がいることをご存知でしょうか。

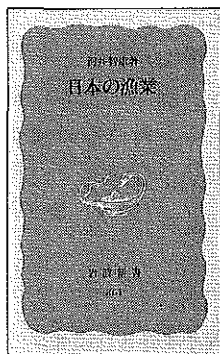
自称山屋の端くれの私にとって九重はよく通った、またこよなく愛するフィールドの一つです。山屋の

間では「九州の山は九重に始まり九重に終わる」といわれるほどですから、何か人を引きつけるものがあるのでしょう。確かに九州本土の最高峰があるし、景観も素晴らしい。温泉はいたる所で湯煙をあげ、エノハ料理が美味しいと、九重の魅力は様々にあるようです。しかしこれぐらいのことだけでは、山屋として一押しフィールドと認めるわけにはいきません。では何が魅力的なのか。それはガイド犬平治号の話に、私の場合どうしても傾いてしまうのです。

話は単純明解で、九重の登山口をうろついていた抜け毛の捨て犬が、バスの切符売りのおじさんにかわいがられ、立派なガイド犬になったという話です。この話はノンフィクションであり、88年に平治号はこの世を去ったのですが、残された数々の感動的なエピソードは今も語り継がれ、映画化もされました。現在でもこの話に胸をうち、九重を訪れる観光客も多いといわれています。

つまり人がその土地や場所に魅せられるのは、人が景観だけでその土地を評価しているのではないということでしょう。人の価値観が多様多様であるが故、ものを捉える尺度というのは、その人によって違って来る、言うなれば、サン＝テグジュペリの星の王子様がいう「美しいところは目に見えないのさ。心で探さないとね」的な感覚の一面を感じたような気がしました。

さて話は元に戻り、現在では亡き親の後を継ぎ活躍しているはずの平治号二世なのですが、こここのところ登山客のエサばかりねだって、本業の道案内を忘れていたようです。この親と子のミスマッチ。ますます奥の深い九重の虜になりそうです。(久本泰正)



日本の漁業

河井 智康 著
岩波新書

本著の中に次のような設問があります。先ずこれから考えて下さい。

『あなたが水産庁長官だったらどう判断しますか。以下の質問にYES、NO、NA（わからない）でお答え下さい。

- ①クジラは資源さえあれば食べてもよい。
- ②魚と一緒にイルカや鳥、亀などが魚具にかかるのはやむを得ない。
- ③サメのヒレだけ取ってあとは海に捨ててもよい
- ④底引き網にかかる雑魚（市場では売れない）は海に捨ててもよい。
- ⑤栽培漁業（稚魚の放流）で生態系が乱れてもやむを得ない。』

著者は、この質問は諸外国から日本漁業に問われている問題であり、経済行為と自然保護の競合について考えてもらうために機会ある毎に聞いているとのことであった。この質問の解説を知りたい方は是非一度本著を紐解いていただくことをお勧めします。

本著は日本漁業の置かれている厳しい現況、このままいったらどうなるのかの予測、今後の日本漁業を維持・回復していくための展開方策について肩のこらないように事例やエピソードをまじえながら

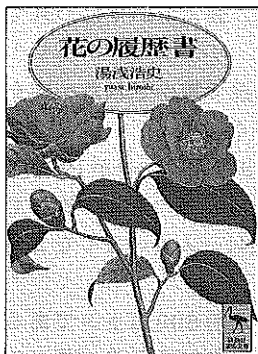
かりやすく解説してあるため、読んでいくにつれて徐々に引き込まれていく。

本著の中で、日本漁業の現況で驚かされた一面を少しここに紹介させていただく。

- ・漁業従業者は1953年に約79万人いたのが1992年には約34.5万人となっており、このままの推移でいくとあと35年後には漁民は一人もいなくなるかも知れない。
- ・家畜や養魚が食べる魚の量が約600万トンであるのに対して、日本国民の魚介類純食料量（骨や内臓を除いた値）は約420万トンと今や人間より豚やハマチが食べる量の方が多い。
- ・現在の日本人の身体の半分は実は外国人である。つまり日本の食料自給率はカロリーベースで既に50%を割っているとのこと。魚の場合、全消費量1,400万トン（源魚換算：すり身など加工された重さを実際の魚の重さに換算）のうち輸入量は500万トンである。さらに食用向けだけに限ると全消費量850万トンのうち輸入分が約400万トンとなり、実に45%を占めている。

著者は、最後に日本漁業を守っていくために次のような3つの基本的な方向を示している。特に3番目の考え方については消費者と生産者をつなぐ地道な運動を起こしていくことが不可欠であると解いている。

- ①食料資源と産業を大切に、生産者にも消費者にも合理性をもつ制度をつくるという方針を明確にすること。
- ②魚の輸入と国内生産についても一定のコントロール下におき、漁業の管理体制を確立すること。
- ③漁業の発展という方針が国民全体から支持されること。



「花の履歴書」

湯浅 浩史 著
講談社学術文庫

以前、糸乗にマダガスカル島のバニラビーンズをくださった湯浅浩史さんが書かれた「花の履歴書」という本を紹介させていただきます。

本書は単なる花のガイドブックではなく、野の花から、いつ、誰が、どこで、どのようなきっかけで栽培を始めたか、それがどのように広がり、改良されていったか、その歴史をできるだけ多くの内外の文献からたどって解説されている。よく知られている百種類の草花を、四季に分類して掲載しており、その思いがけない歴史には、とても興味深いものがあった。以下いくつか紹介したい。

〈オランダでは狂乱相場に……チューリップ〉

1554年にトルコからヨーロッパにもたらされたチューリップは、大変人々に好まれ、新品種作成ブームが起こると、珍しい花色のものが高価で売買され、やがて投機の対象になる。花どころか球根さえも見ない先物取引は17世紀に狂乱状態となり、実在する球根の数以上の売買が行われた。

〈昔は野菜だった？……ケイトウ〉

今ではケイトウが食べられるなど思いもよらないが、江戸時代には、食用の名残が見られる。貝原益軒は「菜譜」に、宮崎安貞も「農業全書」にケイト

ウが食用であることを記している。

人間に履歴があるように花にも歴史がある。その歴史を知ることによって花の世界はもっと豊かになるに違いない。著者はそう述べておられる。丹念な研究で詳細に記された花達の履歴を、ぜひ一度読んでいただきと思う。

(富重 慶子)

編集後記

☞事務所の向い側にアクロス福岡が4月8日にオープンしました。地下には飲食フロアもできましたが、ここで働く人たちも増え、お客さんも増えるため、この地区の昼食戦争はまだまだ続きそうです。

☞今年もよかネットパーティを6月2日に予定しています。いろんな人との出会い、うまいもの、うまい話がたくさん集まることを期待しています。また新しいネットワークができることと思います。

(べ)

よかネット NO.15 1995.5

(編集・発行)

☞九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

☞地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-962-1224

東京事務所

TEL 03-3226-9130